

ベトナムの保育者養成課程における保育技術の教授

—教科書分析から—

門松 愛

An Analysis of the Contents about Childcare Techniques from Textbook in Vietnam's Childcare Training Course

Ai KADOMATSU

抄 録

本稿では、保育者の専門性の文化的相違に関する研究として、ベトナムの保育者養成課程における教科書を分析対象とし、保育者の指導法の「技術」に関する記述の特徴を明らかにすることを目的とした。使用した教科書は、Nguyễn (2019)『幼児教育学』である。まず、ベトナムの教育法やカリキュラムからベトナムのカリキュラム観を整理したうえで、教科書から6つの幼児教育の原理を確認した。そのうえで、教科書に記されている一般的な教授・指導技術、遊びの中での指導法、テーマ保育のなかでの指導法を分析した。結果として、①探索的な活動を重視し、子どもが自ら考え、行動し、テーマを深めていくための関わり、②子ども中心の法則とともに教師の意図性も重視し、望ましい方向や知識、技術獲得の方向を定めた関わり、③子ども中心主義に関連して、ヴィゴツキーの発達の最近接領域の理論に即した関わりが特徴であることを明らかにした。

キーワード：保育者養成，保育者の専門性，ベトナム，指導法，教科書分析

1. はじめに

本研究は、保育者の専門性に関する研究として、特に、求められる専門性の文化的相違に着目している。保育者の専門性に関して、国内外ではこれまで多数の研究がなされてきた。例えば、中坪 (2018) では、保育実践から専門性を捉えており⁽¹⁾、アジア途上国では、UNESCO&SEAMEO (2018) が東南アジア地域の保育者の能力枠組みを示している⁽²⁾。日本では、専門性をどのように捉えるかについて先行研究でも見解が分かれており、小笠原ら(2017)では、保育者の専門性を現場の実態から考えていく必要性に言及し、知識や技能だけではなく、資質の面からも専門性を捉えていくことを指摘している⁽³⁾。一方で、香曾我部 (2011) は、『技術的合理性』と『反省的实践家』が二項対立的に捉えられており、保育技術の体系化がなされていないなどの課題点を指摘している⁽⁴⁾。このような専門性を捉える観点については、国内外で議論が異なると想定され、例えば、門松 (2019) では、アメリカの教科書を分析し、保育者の指導法の技術が教科書上で羅列され、体系的である一方で、子どもの姿の理解からの関

わりという記述が少ないことを指摘している⁽⁵⁾。また、パメラら (2004) は、ヨーロッパ各国の保育者養成課程を比較し、養成課程の教育段階やカリキュラムの相違は、各国の保育や子どもに対する考え方を反映していると指摘している⁽⁶⁾。

このような保育者の専門性の文化的相違について、本稿では、ベトナムを研究対象国とする。先行研究では、アジア諸国の保育者の専門性に関する研究は非常に限られており、特にその文化的相違に着目したものは管見の限り見当たらない。一方で、アジア諸国は、欧米諸国の保育理論の輸入国という共通基盤があるとされ⁽⁷⁾、昨今の幼児教育・保育の普及に伴い、欧米の保育思想や理論を取り入れながら各国の社会文化的背景に合わせて独自化していく過程にあると推測される。この点において、ベトナムでは、就学前教育 (pre-primary) の粗就学率が95.89% (2019年、UNESCO) と高く⁽⁸⁾、近年では、同国内でも保育理論や方法に関する研究が進んでいる。そのなかで、諸外国の影響を受けながら、子ども中心主義、テーマ保育 (原語: 統合学習: học tập tích hợp theo chủ đề) などが導入され、従来の教師主導の保育方法からの脱却が目指されている。このように、諸外国の保育思想の影響を受ける同国において、どのような専門性が求められているのかを検討することは、保育者の専門性を文化的視点から考察し、また、より多面的に捉えることへの示唆を与える点で意義があると考えられる。同国で求められる保育者の専門性をより理論・思想的観点から明らかにするべく、本稿では、保育者養成課程に注目し、そこで使用される教科書を分析対象とする。

以上より、本稿では、ベトナムの保育者養成課程における教科書を分析対象とし、保育者の「技術」に関する記述の特徴を明らかにすることを目的とする。そのために、第2章では、ベトナムのカリキュラム観および幼児教育の原理について整理し、保育の基本構造を検討する。そのうえで、第3章で、ベトナムの教科書で保育者に求められる技術がどのように記されているか、特に指導法に注目し、一般的な教授・指導技術、遊びの中での指導、テーマ保育のなかでの指導という3つに分けて検討する。研究方法は、文献研究である。なお、本稿で使用する語句について、国際的な文脈においては「保育」「保育者」という語句を用いるが、ベトナムに関する記述については、同国で使用される原語に基づき、「幼児教育」「教師」という語句を用いる。ここでの「教師」とは、幼児教育の教師を意味する。

2. カリキュラム観と幼児教育の原理

(1) 教育法および幼児教育カリキュラムにみるカリキュラム観

本節では、ベトナムの幼児教育でのカリキュラム観を明らかにすることを目的とする。結論を先取りすれば、「子ども中心」がベトナムにおける幼児教育カリキュラムでの要点となる。本節では、まず、教育法及び幼児教育カリキュラムにおいて「子ども中心」の考えのもと、探索、経験が重視されていることを示す。そのうえで、幼児教育カリキュラムにおいて具体的にどのような教育方法が想定されているかを明らかにする。

まず、幼児教育カリキュラムの基本目標については、2002年の決議「就学前教育の発展に関する政策」(161/2002/QĐ-TTĐ) から2019年教育法まで一貫して、「身体的、情緒的、知的、美的要素を含めて、総合的に人格の最初の要素を形成し、1年生への準備をすることを目的とする。」ことである⁽⁹⁾。包括的な発達と1年生への準備という国際的に共通する視点から目標が設定されていることがわかる。

そして、2000年代の幼児教育に関わる様々な法令では、子ども中心の考えが確認できる。例えば、2018年「2018-2025年の就学前教育の開発に関するプロジェクト (Đề án phát triển giáo dục mầm non giai đoạn 2018-2025)」では、就学前教育の内容とカリキュラムの革新として、「a) … (中略) …子ども中心の就学前の基準に従って就学前の条件と活動を開発する。」⁽¹⁰⁾とあり、「子ども中心」の考えが重視されていることが分かる。そして、2017年の幼児教育プログラム(修正と補完)では、幼児教育の内容に関する要件として、子ども達が周囲の環境を体験、探索しながら、ニーズや興味を満たして活動することを方法として、「遊ぶが、学ぶ、遊ぶことで学ぶ」ことを示している⁽¹¹⁾。ここから、幼児がニーズや興味を満たしながら経験していくことを目指しており、「経験」「探索」を重視していることが明らかである。

続いて、2017年幼児教育カリキュラムから、幼児教育の方法について国家の枠組みを確認しておきたい⁽¹²⁾。同カリキュラムでは、3か月から3歳、3歳から6歳の2つに分けて、プログラム内容が記されている。本稿では、指導法の分析という観点から、3歳から6歳について内容を確認していく。

まず、特徴的であるのは、能力を身につけることが目指されている点である。年齢別の内容として、各領域のさらに詳細なコンテンツについて記されており(表1)、期待される結果として、表2のように記されている。

表1. 幼児教育カリキュラムに記されたコンテンツの例(3-6歳)(抜粋)

コンテンツ内容	3-4 歳	4-5 歳	5-6 歳
形の識別	正方形、三角形、円、長方形を認識して、識別する。	正方形、三角形、円、長方形、などの形の違いと類似点を比較する。	球、正方形ブロック、長方形ブロック、園中のブロックを認識し、識別する。
社会におけるいくつかの職業	いくつかの一般的な職業の名前、製品や利点。	人気のある職業、伝統的な地方の職業の名前、道具、製品、活動と意味。	

(出典) 幼児教育カリキュラム (Chương Trình Giáo Dục Mầm Non) より筆者作成

表2. 期待される結果についての記述の例(3-6歳)(抜粋)

分類	3-4 歳	4-5 歳	5-6 歳
物事や現象の特徴を考え、学ぶ	1-1. 現象に関心、興味をもち、注意深く観察する—主題について質問する。	1-1. 物事の変化や周囲の現象に疑問を持つなど、教師の提案や指導によって周囲の物事や現象の変化に注意を払う。:なぜ木は枯れている?なぜ葉が濡れる?	好奇心をもち、周囲の現象に疑問をもち、探究する。:なぜ雨が降る?

(出典) 幼児教育カリキュラム (Chương Trình Giáo Dục Mầm Non) より筆者作成

そして、教育方法としては、「実践方法・経験」「視覚・実例(観察、モデリング、イラスト)」「音声方式」「奨励」「評価の例の設定」があり、具体的な能力獲得に向けた意図的な指導法が想定されていることがうかがえる。なお、この点は第3章で詳細に検討していく。

最後に、子どもの発達評価に関して、日々の評価を、観察、子どもとの会話、状況判断、子どもの作品分析、保護者との会話でおこない、変化の観察と記録をおこなうこととされ、段階別評価として、発達のレベルを、身体的、認知的、言語的、社会情緒的、審美的な面で、観察、会話、作品分析、または演習/クイズで評価することが記されている。「演習/クイズ」での評価という点からも、能力獲得に向けた考え方をうかがうことができる。

以上、政策や幼児教育プログラムからは、「子ども中心」の考え方のもと、探索や経験を通して、能力の獲得をおこなっていくことを目指す点が同国の幼児教育課程の特徴となっていることが指摘できる。

(2) 教科書における「幼児教育の原理」

1) 分析対象とした教科書の基本構成

対象とした文献は、Nguyễn (2019)『幼児教育学』である(以下、『幼児教育学』と表記)⁽¹³⁾。同書は、ベトナムのダナン大学において使用されている教科書であり、幼児教育、保育の基本的事項について記した書籍であることから、分析の対象とした。同書は2部構成であり、第1部は全8章、第2部は全6章で構成される。目次は、表3の通りである。

表3. 『幼児教育学』目次

第1部：幼児教育に関する諸問題
第1章：幼児教育は科学である
第2章：世界の幼児教育の傾向
第3章：わが国での幼児教育の傾向
第4章：幼児教育の原理
第5章：幼児教育の目標と使命
第6章：幼児のための教育の内容、方法と形式
第7章：幼児教育のプログラム
第8章：幼児教育の先生
第2部：1年生への準備のための幼児期の子どもたちの活動の組織
第1章：幼児の毎日の生活と活動
第2章：幼児のための組織的な活動
第3章：幼児のための遊び活動の組織
第4章：幼児のための学びの活動の組織
第5章：幼児のための儀式や祭典の組織
第6章：1年生に向けた子ども達の準備
おわりに

(出典)『幼児教育学』より筆者作成

このうち、本稿で分析対象としたのは、第1部の第4章「幼児教育の原理」、第6章「幼児のための教育の内容、方法と形式」、第2部の第3章「幼児のための遊び活動の組織」、第4章「幼児のための学びの活動の組織」である。このうち、第1部第6章については、翻訳はベトナム教育研究者である畿央大学の関口洋平氏に依頼し、そのほかの章については筆者が翻訳を

おこなった。

2) 幼児教育の原理

まずは、幼児教育の基本原則から確認しておきたい。『幼児教育学』では、第4章「幼児教育の原理」として、次の6点が示されている。1点目は、子ども中心である。具体的には、「我が国の幼児教育の観点もまた、教育過程において『幼児を中心とする』原理を非常に重視している」とされる。ここで引き合いにだされている教育思想家がレオンチェフ⁽¹⁴⁾とヴィゴツキーである。すなわち、前者では、「活動理論」として、主導的な活動を通して、幼児の全面的な発達となることが説明され、後者では、発達の最近接領域の思想が記されている。では、この子ども中心の原理のもと、教育者の関わりとして求められていることは何かを確認していきたい。具体的には、下記の通りに記されている。概して言えば、子どもの考えや行動を尊重し、何事も強制しないこと、そして、子どもの協力者または発達の「支点」として、足場かけの理論に従って関わるということが求められていると言える。

—幼児の考えや意思、決定を重視する。大人の方向から強制したり、詰め込んだりしない。しかし、自由に放って置いたり、甘やかしたりはしない。

—幼児が新しいものを作り出す自覚や自立を発達させる有利な機会を作る

—教師と子どもの関係は、同様に感じるものであり、温かい強い愛のあるものである。教師と個の関係は、友人であり、共に協力する関係である。

—教育者への要求は、観察しなければならないこと、包括しなければならないこと、幼児を助けなければならないこと、幼児の個人を重視しなければならないことである。例えば、幼児が何かに向かうことを説得するように追加で説明したりはせず、催促せず、命令を下したり、禁止したりせず、大変に怒ったり、強制したりしない。

—魅力的な今日を作り、計画を立てることを重視し、幼児が新しく作りだしたり、知識を広げることを助ける。豊かな活動環境を作ることは、活動において幼児主導を助ける。

—幼児が発達するために、幼児のための支点、その後、幼児が自らおこなって、より高い梯子を上がる発達を助ける。教師は、幼児がもともと持っている潜在能力を引き出し、助け、忠告し、案内し、幼児が解決できる状況のために提案する。(pp.53-54)

2点目は、「環境を通じた教育、幼児を惹きつける様々な豊かな活動を作る」ことである。ここでは、先進国で発展してきている趨勢として、幼児の生活と園での生活を密接にし、実生活に近い魅力的な豊かな教育環境を作る重要性を述べている。環境を通じた教育の方法については、「空間、時間、方法について十分な条件を満たす環境を作る」といった原則の提示があり、具体的な教育方法について、「作られた環境は、幼児が互いに自ら進んで活動することを保障せねばならず、幼児に、自分の興味、ニーズ、周囲の世界を探索し、研究する多くの機会を作る。」など、探索的環境となるように配慮することが述べられている (pp.54-55)。

3点目は、統合的な幼児教育である⁽¹⁵⁾。統合的な幼児教育とは、いわゆる「テーマ保育」であり、幼児の実生活に近いテーマとなる主題に従って、様々な豊かな活動を含めた教育活動として編成され、「幼稚園での子どもの様々な活動を統合するための活動」が展開される。具体的には、1つのテーマに基づいて、個人やグループなど様々な集団での活動、コーナー活動、様々な教育方法の活用があげられている。統合教育に関しては、「世界や地域の様々な国では、

現代、統合的アプローチから幼児教室プログラムを作っている」(p.112)とあり、統合教育という理念・方法は、海外の例を参照として導入されたものであることが分かる。そして、子どもとの関わりとして、「教師は、幼児が自分で活動をおこなうことができる時には助けることを少しずつ減らすことによって、幼児を支える。」「大人は、幼児が積極的に周囲の環境と関わったり、一緒に生活することを助けたりする任務があり、効果がある。」とあるほか、子どもが主体的に探索的に活動できるような計画を立てる重要性が述べられている (pp.56-57)。

4点目は、「不変的で、連続性と系統性を保証する」ことである。ここでも、発達の最近接領域の思想が引き合いに出され、子どもの発達に即した実践について述べている。具体的には下記の通り、設定した目標に対する段階的な課題設定や、能力育成のための援助、教師はあくまでも支える立場であることについて述べられている。

- 教育者は、教育の目標を重視しなければならず、その目標に到達することの実現に努力しなければならない。
- 幼児に潜在している力を開発するのに気をつけることは、幼稚園での活動を通して、潜在能力をさらけ出せるような条件と機会を作ることだ。幼児のための任務を任せるのは、ちょうど力に合ったものか、または、幼児の実際の力ではほんの少し難しいものでなければならない。幼児が自信を持てるように励まし、任務を自分自身で完遂できるように努力することを励ます。もしも幼児が困難に出会ったら、教師は、適切に助けなければならない。
- 幼児の代わりをしてはならない。
- 幼児が、認識し、分析し、判断し、推論するように導く。幼児に考える時間を取っておき、幼児が考える流れを中断してはならない。
- 活動の環境と条件を作る。常に変わらず参加して探索でき、周囲の世界を経験できるような、幼児が簡単なものから難しいものまでできるような、簡単なものから複雑なものまで、任務を任せ、少しずつ幼児の作業の難易度を上げる。(p.58)

5点目は、幼児教育の個別化であり、すなわち個人の重視である。「機械的にそのまま真似ることを避け、幼児教育とケアにおける一律の教育モデルを避ける」とされ、「同様に、自身の主観的な期待を押し付けるのではなく、幼児が最大の能力を発揮するのを助けるために、幼児教育の活動を設計する。」のように子ども中心の考えに基づいた保育の展開が求められている (pp.59-60)。

最後に6点目は、教育の社会化である。これは、制度的な観点でもあるが、家庭、幼稚園、社会の力を合わせて幼児教育を進めていくことが述べられている (pp.60-61)。

以上、ベトナムの保育においては、特に子ども中心が重視されており、子どもが自ら探索し、行動するような援助が意図されていること、また、発達の最近接領域の考え方に従って、段階的な課題設定や支援が求められていることが指摘できる。この原則に従って、具体的にどのような指導法が記されているのか、次節で確認していきたい。

3. 活動の種類と保育者の関わり

(1) 一般的な教授・指導技術に関する記述

まずは、第1部第6章「幼児のための教育の内容、方法と形式」から、教育方法の側面の特徴を見ていきたい。まず、第1節「概念」において、「幼児教育の内容を組み立てる際には、幼児のニーズや興味だけでなく、教育目標を踏まえる必要がある」(p.84)と示される。そのうえで、「現在、我が国を含めて、世界中の、そして地域の多くの国々では、幼児教育のカリキュラムの内容は幼児の各成長領域に基づいて構築され、社会生活と結びついた各テーマや観点に基づいたものとなっている」とし、「テーマに基づいた統合的アプローチ」の方法を重視している(p.85)。そして、「教師が中心であり、知識の伝達を重視するという普遍化モデルに基づく観点をもった改革カリキュラム(旧式)の遺制を克服しなければならない」(p.87)と、教師中心の伝統的手法を明確に否定している。

このように、子ども中心の方法に基づいて、教育方法として、次のようなものが挙げられている。すなわち、情報供給源に基づく方法として、①直観的方法、②言葉を用いる方法、③実践・体験方法、④教育的条件を作るための方法、⑤幼児に対して概念と信念を形成する方法、⑥評価方法であり、教師または幼児の特殊な活動に基づく方法として、①直接的な教育的働きかけ、②間接的な教育的働きかけである(pp.89-104)。これらの一部を表4、表5に示した。表4、表5に示したように、教育方法では、「子どもにどのようになってほしいか」また、「その姿になるためにどのように関わるか」という教師の意図性が見られる記述が確認できる。す

表4. 情報供給源に基づく方法(一部抜粋)

小分類	内容の概要	教師の役割の概要
直観的方法	感覚を用いて体験する	<ul style="list-style-type: none"> ・計画をもった方法でおこなう(簡単なものから難しいものへ)。 ・対象の特色を発見しやすいようにする ・対象や現象、事物の各属性の間の関連性を理解するようにする ・実物、写真、剥製、映像、ICTの使用
実践・体験方法	実際に活動して体験する	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は、…(中略)…各感覚を用いて玩具のありようを発見させるようにする。 ・子どもが子ども園における活動を自ら望み、興味をもつようになることで与えられた任務を積極的に解決するように促す ・子どもに何度も練習させる
教育的条件を作るための方法	探求的な活動をおこなう	<ul style="list-style-type: none"> ・問いかけや提案は、幼児に考えさせ、比較、分析、体系化のような思考の操作を活用させ…(以下略) ・幼児の積極的な主体性の役割を保証し、活動の方向性と発展性を保証する
幼児に対して概念と信念を形成する方法	情操道徳教育	<ul style="list-style-type: none"> ・説明、解説、絵、写真、模型、略図など、テクノロジーなど ・励ましたり、模範を示したりする ・教師の言葉は簡潔で、具体的でわかりやすく、説明や解説に対して挿絵を入れるなど補助的な方策と結びついたもの ・幼児に問いかけをおこなう

(出典)『幼児教育学』(pp.89-97)より筆者作成。

なわち、例えば、直観的方法であれば、「対象の特色を発見しやすいようにする」のように、幼児が関心をもつ方向性がある程度決められている。

表4、表5のような指導法を示しながら、「実践的な活動のなかで幼児はより深い方法で知識やスキルを獲得するのである」(P.92)のように能力獲得の意図を明確にしており、「教師は、指導の言葉や直観を用いる道具を使い、実践的な行動へと幼児を引き込み、一歩ずつ活動を組織して幼児が積極的に活動できるように促さねばならない」(p.98)として、教師の指導性を重視している。また、指導法の例としては、表4、表5のほかにも、「幼児に観察させる過程においては、教師は何よりもまず幼児に全体像を知覚させ、その後でそれぞれの部分や詳細を分解していき、最終的に各部分や詳細相互の関連性を組み立てるようにさせる。その際には、幼児が観察対象の性質的特徴やしるしを把握できるように時宜を得て提案したり意見を求めたりすることに加えて、体系をもって幼児の経験を動員できるような問いかけを教師はおこなうようにする。身の周りの世界に関する表象を正確におこなうとともにより豊かなものにする。」(p.103)のように教育的意図をもった細かな過程が記されている。

このように、一般的な指導原則に関しては、子どもが能力を獲得するための意図をもった指導法の習得が求められており、子どもが自ら考え、探究し、知識や技能を身に付けるための関わりが中心となっていることが指摘できる。

表5. 教師または幼児の特殊な活動に基づく方法 (一部抜粋)

直接的な教育的働きかけ	特定の技能の形成 (知育、美育、徳育)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児が機械的に取り組んだり、教師のまねをしたりするだけであれば、幼児の創造力を高める上で限界がある ・ 任務を与えるだけでなく、お手本や模型の提示とともに、励ましの言葉をかけたり、意見を求めたり、直接的な指示を出したりする
間接的な教育的働きかけ	探求的な活動 (年長向け)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が遊びの活動を指導するときは、組織する者という役割として、多様な遊びの環境を形成し、幼児をそうした遊びへと引き付けることに関心を払う ・ 励ましながら幼児の相談に乗り、遊びのテーマを広げるうえで手助けし、遊びの内容を豊富にし、テーマに基づいてそれぞれの遊びのグループを結びつける。 ・ 教師は幼児とともに仕事をし、幼児を自立的な活動へと促し、必要な方向付けを与える技能をもたなくてはならない。

(出典)『幼児教育学』(pp.97-100)より筆者作成。

(2) 遊び活動における保育者の関わりに関する記述

続いて、第2部第3章、第4章の分析を通して、保育者に求められる関わりを見ていきたい。まずは、第2部第3章「幼児のための遊び活動の組織」から、遊びの活動において保育者のどのような関わりが求められているのかを検討していく。遊びの指導については、遊びの種類に分けて述べられている。ここで記されている遊びは全部で5種類であり、①役割を演じる遊び、②劇遊び、③構築遊び (ブロックや砂場遊びなど)、④学習遊び、⑤運動遊びである。それぞれの遊びの種類に応じて、どのような指導が求められているのかを抽出していく。

まず、役割を演じる遊びについては、第一に、環境構成について、「多様で、豊かで、魅力的な安全な遊びの環境を作らなければならない」(p.168)とされる。そのうえで「遊びの素材を改善したり、探して集めたりして、まさに子どもが好む遊びにして、幼児が遊ぶ時にタイミングを得たものになるようにする。」(p.168)とされている。そして、教師の立場はあくまでも見守る立場であり、子ども中心の原則に則って、「子どもの興味を引き起こす任務をおこなう」「幼児が自覚的に新しく創造できるように計画を作り、教師の意図に従った遊びを幼児に強制してはならない。」と述べられている (p.168)。

このような基本原則に則った指導に加えて、遊びの方向性を修正し、広げていく関わりについても述べられている。例えば、下記のように記されている。

- 幼児が遊んでいるとき、教師は特に幼児の遊びの内容に関心をもち、幼児が消極的で健康的でない遊びのときに偏りを矯正することが間に合うように、周囲の人びとの健康的な関係や現象を真似するように方向づける。その時、教師は、幼児がテーマを広げ、内容を豊かにすることを助けるように注意しなくてはならない。テーマに従って、いろいろな遊びとの連結を広げるように、遊びと遊びの見解を作り、意見を求めたり、幼児に提議したり、出た意見が幼児の理解と符合するように、または遊びの環境を作るなど、注意する。
- 柔軟で豊かな関係のために、そして、行動の調整を発達させることができるように、教師は、幼児が比較的簡単なしかし順序のある遊びの計画をつくるのを助ける（遊びの行程をはっきりさせる）。低いところから高いところへ行けるように、簡単なものから複雑なものまで行けるように、例えば、第一に、幼児が小さな集団に従って、簡単な内容である遊びを遊ぶとき、大人はそのテーマに従った集まりを連結させるように考えて主導する。(p.169)

このように、役割を演じる遊びにおいては、子どもが自分で様々なことを考え、計画することを尊重しながらも、望ましくない方向へといかないように、また、遊びが広がっていくような援助が求められていることが指摘できる。

2つ目の劇遊びでは、作品の選び方、遊びの流れの方法などより具体的な指導について記されている。例えば、遊びの流れでは、物語を読み、子どもと物語の流れや登場人物について考えを共有し、遊び場や小道具などを作り、役割分担について話し合ったのち、最初は教師が主導的に導きながら、子どもが自ら遊ぶことができるタイミングで教師は撤退することと記されている (p.171)。さらに、遊びのなかで、引っ込み思案など子どもの個人差を考慮して、友達同士の友好的な関係を築けるように関わることや、遊びの終わりには、子どもたちが舞台を片づけて楽しかった気持ちを共有することなどが記されている (p.172)。

3つ目の構築遊びでは、教師の導入の大切さについて具体的に記される。すなわち、「第一に、教師は子どもたちに国内および世界など周囲の環境のシンボルを拡大して提供し、写真、モデル、映画、ライトなどを通して構築活動に興味を持つように子どもたちを教育する必要がある」(p.174)と述べられている。そして、構築遊びで特に重視されているのが、長期に継続することである。「教師は、活動を指導し、子どもたちが理解できるように具体的な説明に従いながら、おもちゃや遊び道具で遊ぶように子どもたちを指導し、構築作業への長期的な関心について子どもたちを教育し、プロジェクトを維持するようにする。」「教師は子どもたちが遊びのテーマに徐々に落ち着くのを助け、一緒に遊ぶために友達と団結することを学び、一緒に遊ぶ意図を実現する。」「教師は常に子どもたちが彼らの独立性、創造的な想像力を発達させる

ための条件を作り出すことに注意を払い、子どもたちが構築遊びのトピックを拡大し、内容を豊かにして、異なる作品を作ることを奨励する。既知の組み立てと構築の技術を練習し続け、それらをより高いレベルに発展させ、曲線の作成、線の巻き取り、多くの部品の組み立て、装飾などのより難しい構築技術を子どもたちに教える」[「グループの作品にコメントして評価し、次回より良い、より美しい作品を作るために経験を積む練習をする」(pp.174-175)のように記されている。

4つ目の学習遊びでは、認知面への働きかけについて記述される。例えば、幼児の個々の知的能力に注意を払うこととされ、認知力の高い子どものために、難しいパズル、未発達な子どものために、より簡単なパズルを用意することが記されている (p.182)。また、「遊びのなかに多くの状況を作り出し、子どもたちに遊びに必要な認知タスクを実行するための適切な方法を検討して選択させる」(p.182)ことや、「機械的な模倣を避けるために遊びのルールを注意深く説明するのではなく、子どもたちが見つけられるように質問する必要がある」(p.182)なども注意点として挙げられる。

最後に、運動遊びでは、他の遊びと同様に、年齢別の指導法や導入方法への言及のほか、子どもの主体性を尊重した記述として、「新しい遊びを開始するときは、常に子どもの動きを修正するとは限らない。修正すると、子どもの遊びへの興味が低下するためである。」(p.184)などのように記される。そして、活動時間について、「子どもが過度に運動したり、不均一に動いたりしないように注意する。…(中略)…幼いクラスでは15分を超えてはならず、年長のクラスでは25～30分を超えてはならない。遊びを終了して、静的活動に切り替える」のように記され、年齢別の配慮が具体的に記されている。

このように、遊び活動のなかの指導では、既述した6つの原則について、子ども中心や環境構成の原則が確認できる。特徴的な点として、探索的な問いかけ、子どもの遊びを広げる指導、長期的な活動となるような指導など具体的な指導法が記述されている。加えて、子ども中心でありながらも、子どもが遊びに興味をもつための教師の導入方法や教師の主導の仕方、子どもの遊びが望ましい方向へいくための関わりなど、教育の意図を持つことも重視した記述となっていると言えるだろう。

(3) テーマ保育における保育者の関わりに関する記述

最後に、第4章「幼児のための学びの活動の組織」について検討していく。同章で「学びの活動」として述べられているのは、既述した「統合教育」、いわゆるテーマ保育である。統合教育においては、遊び活動の指導よりもさらに、発達の最近接領域に基づいたアプローチおよび探索への援助について記述される。

まず、発達の最近接領域に基づいたアプローチについては、「教師は、はしごかけを手伝い、幼児にとっての支点であり、組織し、導き、機会や状況、新しい挑戦を作り、心から信じる感覚を作り、幼児と一緒に学ぶなかで幼児を助ける。」「幼児に学びを教授することは、幼児の『発達の最近接領域』のアプローチにおいて、意義がある発達を保障しなければならず、幼児の潜在能力の開発をしなければならず、幼児の発達をより高いレベルまであげなくてはならない。」(p.200)のように記される。

そして、探索への援助として、「学び環境は、幼児にとって、選び、理解したいという好奇心を刺激する機会でなければならない。環境は、幼児が活動したり、実地で探索できるように、互いに愛情深く、親愛的な関係のように、方法、時間、空間の条件が十分でなければならない。」

「選択における柔軟性を保証し、幼児に符号する学習形式や方式、方法の合成を保証する。主題の探索過程では、教師は、柔軟に、幼児個人や集団において新しく表れる状況を解決しなければならない。」(p.200)のように、環境構成や課題設定について記されている。

このほか、特徴的であるのは、子どもとの関係性として、協同的な愛着関係が記されていることである。例えば、「教師と幼児は一緒に学び、一緒に遊び、探索し、分け合い、結論にたどり着く。」「教師と助け合い、導く組織の下に、様々な学習環境を作らなければならない。幼児のための学習環境を組織する際は、安全で、頼り、愛する感覚をもつようにしなければならない。」(p.200)のように述べられている。

このような基本原則に基づいて、さらに具体的な教育方法として、①直観的方法、②遊びの使用、③実践と体験の方法、④幼児の奨励、⑤主題に従った様々な領域に属する活動の統合と編成の方法の使用、⑥幼児の観点の最大限の開拓、問題解決能力、新しく想像することを刺激するために現れる形式と状況を作るための簡単な質問の使用が挙げられている。以下では、それぞれについて、簡潔に確認していきたい。

まず、直観的方法である。直観的方法とは、すなわち、視覚、聴覚など直観的に子どもが分かるような工夫をして指導をおこなうことである。「教師は、主題の研究・探索の過程で幼児が感覚を用いることに努めなければならない。」(p.203)とされる。ただし、ここでは、その具体例については示されておらず、「集団からの学び・遊びの一部を保存し、構築することで、研究・探究するような条件、機会を作り、主題に従って、絶対に必要な遊びを用いるような空間、時間の条件を作る。」(p.203)のように抽象的に記されるに留まっている。

続く、遊びの使用や実践と体験の方法についても、前者は、「幼児の良い活動は、遊びを通じた学びである。そのため、教師は、幼児の学習主題に符合する豊かな遊びを使用しなければならない。」(p.203)とあり、後者は、「教師は、幼児に近い主題の探索過程において、感覚の使用や体験、実践を強くしなければならない。この基礎において、幼稚園での主題に従った探索活動において幼児の創造や思考過程が発達する。」(p.203)のような抽象的な記述である。さらに、幼児の奨励についても、「教師は、主題に従って学ぶ活動で幼児を観察することで励まし、時宜を得て励まし、積極的な新しく作る学習任務の完遂を助ける。」(p.203)という記述に留まる。4つ目の主題に従った様々な領域に属する活動の統合と編成の方法の使用については、教師が領域を超えて様々な遊びや活動を統合していくという原則が記されているのみである(p.204)。

最後の質問の使用については、「主題に従った統合教育において、教師は、質問や考えさせる言葉を使用することを強くしなければならないし、幼児の知的活動を刺激するための状況を作らなければならない。幼児がさらされる機会を作り、主題に従って学ぶとき、遊ぶときに、観点や予測を発達させる機会を作る。」(p.204)とされている。ここから、教師が子どもの探索を支えるための働きかけをすることが求められていることが分かる。

このように、テーマ保育では、具体的な教育方法についてはあまり記されてはおらず、一般的な原則が示されている傾向にあるが、「教師は、新しく作られる様々な教授方法を適用することを奨励される。活動の一部を作ることによって、教授方法を改革する条件を作ることで、幼児は、考える活動を積極的にできる。」(p.198)のように、幼児が考え、主体的に活動するために、様々な教育方法を活用していくことが推奨されている。

4. 考察

以上、ベトナムの保育者養成課程で使用される教科書である『幼児教育学』から、ベトナムの幼児教育者に求められる専門性について検討してきた。同国において求められる教師の技術として、特徴的であるのは次の3点である。

1点目に、探索的な活動が重視され、子どもが自ら考え、行動し、テーマを深めていくための関わりが求められている。この点については、テーマ保育という幼児教育の実践の原則に基づいて、子どもの批判的思考力、問題解決能力などを養っていくことを目的として展開されていると推測される。一般的な指導原則、遊びの指導、テーマ保育の指導のいずれでも、この働きかけについて繰り返し述べられ、様々な例をもとに説明がなされている。ここから、現在のベトナムの幼児教育の中心的な指導の1つとして、このような指導法の確立が目指されていることが予測される。この点については、テーマ活動自体が海外から導入されたものであるという性質上、ベトナム独自の文化的背景に従ったものであるのかは明らかではない。この点については、テーマ保育の導入経緯、探索的関わりの指導法の根拠などを丁寧に分析していく必要があると考える。

2点目に、子ども中心の法則は随所に見られながら、教師の意図性も重視されており、望ましい方向や知識、技術獲得の方向を定めた関わりが求められている。例えば、遊びを広げていくという場面でも、望ましい方向へと遊びが進むように展開されていたり、一般的指導原則における観察の方法など、子どもがある概念を獲得するための指導法が詳細に記されていたりする。ベトナムは元来、教育熱心な国として知られ⁽¹⁶⁾、幼児教育の方法は教師主導の方法が一般的であった⁽¹⁷⁾。ここから、子ども中心の原則のなかでも、子どもが目に見える技術や成果を得ることが社会的に求められているのではないかと推測する。ただし、この点についても、現地でのインタビュー調査などにさらに詳細な検討が必要である。

3点目に、上記の子ども中心主義に関連して、発達の最近接領域など、ヴィゴツキーの理論に即した関わりが求められている。すなわち、子ども中心主義の根拠としてヴィゴツキーの理論が持ち出され、子どもへの関わりについても、段階的な課題設定や教師は子どもが少しずつできるように支える立場として役割を担うことが述べられていた。この点については、ベトナムが社会文化的に社会主義圏である旧ソ連の影響を強く受けていることが背景として考えられるだろう。発達の最近接領域に基づいた保育展開、指導法は、ベトナムの保育者養成課程での特徴であるとも考えられ、国内外の様々な保育思想、理論を展開しながらも保っている独自性として考えることができよう。

5. おわりに

本稿では、ベトナムの保育者養成課程における教科書を分析対象とし、保育者の「技術」に関する記述の特徴を明らかにすることを目的とした。結果として、①探索的な活動を重視し、子どもが自ら考え、行動し、テーマを深めていくための関わり、②子ども中心の法則とともに教師の意図性も重視し、望ましい方向や知識、技術獲得の方向を定めた関わり、③子ども中心主義に関連して、ヴィゴツキーの発達の最近接領域の理論に即した関わりが特徴であることを

明らかにした。本稿では、分析対象とした資料が1点のみであり、この結果がベトナム全土で共有されているものであるのかについては慎重な検討が必要である。また、ベトナムの独自性を見出すためには、歴史的な展開に加えて、現場の実践との関連性や保育者養成課程での実際の指導法の分析等、さらに重層的な検討が求められる。これらの点については、今後の課題としたい。

注・参考文献

- (1) 中坪史典編『テーマでみる保育実践の中にある保育者の専門性へのアプローチ』ミネルヴァ書房、2018年。
- (2) UNESCO and SEAMEO, *Pursuing Quality in Early Learning Vol.1 Early Childhood Care and Education (ECCE) Teacher Competency Framework for Southeast Asia (SEA)*, UNESCO, 2018.
- (3) 小笠原文考ら「保育現場の視点からとらえた『保育士の専門性』議論の再考」『保育科学研究』第8巻、2017年、84-92頁。
- (4) 香曾我部琢「保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第59集・第2号、2011年、53-68頁。
- (5) 門松愛「保育内容と指導法に関する日米比較—教科書分析を通して—」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』第65号、2019年、229-241頁。
- (6) パメラ・オーバーヒューマ&ミハエラ・ウーリッチ著、泉千勢監修・編訳、OMEP日本委員会訳『ヨーロッパの保育と保育者養成』大阪公立大学共同出版会、2004年。
- (7) 鶴田義男『アジア諸国の幼児教育者』近代文芸社、2007年。
- (8) UNESCO Statistics : <http://data.uis.unesco.org/#> (最終アクセス2021年8月3日)
- (9) 2002年決議「就学前教育の発展に関する政策」(Quyết Định Của Thủ Tướng Chính Phủ Số 161/2002/QĐ-TTg Ngày 15 Tháng 11 Năm 2002 Về Một Số Chính Sách Phát Triển Giáo Dục Mầm Non) (<https://thuvienphapluat.vn/van-ban/giao-duc/quyet-dinh-161-2002-qd-ttg-chinh-sach-phat-trien-giao-duc-mam-non-50228.aspx>) 2019年教育法 (LUẬT GIÁO DỤC) (Luật số: 43/2019/QH14) (<https://thuvienphapluat.vn/van-ban/Giao-duc/Luat-giao-duc-2019-367665.aspx>)
- (10) 「2018-2025年の就学前教育の開発に関するプロジェクト」(Đề án phát triển giáo dục mầm non giai đoạn 2018-2025) (<https://dochoiphulong.com/de-an-phat-trien-giao-duc-mam-non-giai-doan-2018-2025/>) (1677/QĐ-TTg)
- (11) 「遊ぶが、学ぶ、遊ぶことで学ぶ」“chơi mà học, học bằng chơi” (同上URL)
- (12) 2017年幼児教育カリキュラム (CHƯƠNG TRÌNH GIÁO DỤC MẦM NON) (No. 01/VBHN-BGDĐT) (<https://thuvienphapluat.vn/van-ban/Giao-duc/Van-ban-hop-nhat-01-VBHN-BGDĐT-Thong-tu-Chuong-trinh-giao-duc-mam-non-2017-342703.aspx>)
- (13) Nguyễn Thị Hoa, *Giáo Trình Giáo Dục Học Mầm Non*, Nhà Xuất Bản Đại Học Sư Phạm, 2019. (『幼児教育学』)
- (14) アレクセイ・レオンチェフ (1903~1979)。ロシアの教育心理学者。活動理論を提唱した。
- (15) 「統合型アプローチ」については2004年からパイロット校におけるプログラムの試験運用が開始されている (出口真弓「第4章 ベトナム—『ホーおじさんのよい子ども』を育てる幼児教育」池田充裕・山田千明編著『アジアの就学前教育—幼児教育の制度・カリキュラム・実践』明石書店、2006年、93頁)。
- (16) トゥオン・ミン・ズク&レ・ヴァン・ディン著、野島和男訳『ベトナムの都市化とライフスタイルの変遷』ピスタピー・エス、2015年。
- (17) 浜野隆・三輪千明『発展途上国の保育と国際協力』東信堂、2012年。

謝辞

本研究は、JSPS若手研究「子どもと関わる技術の教授法に関する比較研究：アジア途上国

に注目して」(課題番号19K14161)における助成を受けおこなった研究の成果である。

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the characteristics of teaching technique for childcare workers by analyzing textbooks in the childcare training course in Vietnam as a study on cultural differences in the specialty of childcare workers. The textbook analyzed in this paper is *Early Childhood Education* (Nguyễn, 2019) . First, this research shows the Vietnam's view of the ECCE curriculum by analyzing the educational laws and curriculum. Then, the six principles of early childhood education is revealed from the textbook. After that, I analyze general teaching techniques and teaching methods in play and theme activity described in the textbook. As a result, it is clarified that they need the following techniques for childcare workers: (1) to make children think and do by themselves, and deepen a theme with emphasizing the importance of exploratory activities, (2) to support children to get some knowledge and skills by showing desirable directions with considering the child-centered method, and (3) to practice the method of zone of proximal development by Vygotsky in relation to the child-centeredness.